

令和元年度社会福祉学研究科 修士論文要旨

地域における特別養護老人ホームの終活支援の可能性—公益事業を通して—

工藤 正司

自らの人生の終わりに向けた「終活」という取組みが広がるなか、死の前後の対応を家族が担う前提は崩れつつあり、「身寄りのない高齢者」は支援の必要性から見過ごされ、尊厳が軽視される可能性を内包している。

本研究では、終活相談対応の実態と課題を把握した上で、終活支援に求められる要因を明らかにし、特別養護老人ホーム（以下、特養）の公益事業として、身寄りのない単独世帯高齢者に対する終活支援モデルの提案を目的とした。

第一に、岩手県内の地域包括支援センター（以下、包括）60ヶ所（悉皆）に質問紙調査を行い、自由記述データをテキストマイニング分析した上で、終活相談対応の実態と課題を把握した。

第二に、包括の管理職者10名を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査から質的記述的分析を行い、終活支援に求められる要因を明らかにした。

第一について、2017年度では17ヶ所の包括に相談があり、内容はエンディングノート、相続、葬儀式、遺品整理の順に続いた。また、テキストマイニングの共起ネットワーク分析から、5つのカテゴリーが示された。

第二について、終活支援に求められる要因は、【人とのつながりが薄れることで広がる不安】【終活の取組みをめぐる格差の実態】【支援を困難にさせる要因】【人との関わりからサポートし合える地域づくり】【終活を支援することの価値と可能性】という5つの概念的カテゴリーが確認された。

終活相談対応の実態と課題では、多くの終活情報が適切な情報や手段として伝わっていない可能性があり、本人の意向がわからないことで支援が困難となる。「迷惑をかけたくない」という意識と共に、話せる関係の人がいない状況が確認された。

終活支援に求められる要因では、①地域とのつながりが弱く、頼れる家族や身寄りがいない人びとへの支援、②誰が本人の意向を事前に確認し、いざという時に伝える手段、③交流や対話の機会と場の確保、④より身近な地域で、中立的な立場から終活の伴走型支援の必要性が示された。

これにより、地域とのつながりが弱く、孤立や頼れ

る家族、身寄りのない単独世帯高齢者を対象に、本人の意向を事前に登録し、必要な情報を代替し伝達すること。また、交流や対話の機会と場を確保しながら、中立的立場から伴走型支援を行うこと等を内容とした終活支援モデルを提案した。本研究により、特養の公益事業として終活を支援する意義と可能性が示されたと考える。

甲状腺疾患を抱えて生きる体験の語り

坂本 蒼

病気を持つ者はどのように病いを体験をしているのだろうか。これまで様々な研究者が病いの語りを研究し、患者の体験に耳を傾けることの重要性と説いてきた。しかし、研究の対象となっている病いは少なく、明らかにされていない患者の体験は数多くある。

病いの1つに甲状腺疾患がある。甲状腺疾患は、10人に1人がなっているともされる病気だが、発症に至る原因は不明であり、根本的な治療法もなく、未解明の部分が多い疾患である。患者の体験について扱う研究も日本においては少ない。

本研究では、甲状腺疾患患者の体験を主に卒業課題研究で得られた「自分の体調がよく分からない」という訴えに注目し、患者が病いの体験のどこに「分からなさ」を感じ、どういった体験をしているのか、そしてそれとどう付き合っているかをみていくこととした。

インタビューとアンケートを用いた調査から、甲状腺疾患患者が診断前は【身体の違和感】、診断後は【治療法の選択】、【予後の不確かさ】、【数値が良くても体調が悪い】という分からなさを感じていることが分かった。

対処としては、個々の分からなさに応じて行っているものが多いが、病歴が長さで認知的な対処に違いがあることが示唆された。病歴の短い患者は、体調不良を病気のせいにしてもよいのかという迷いを見せる一方で、病歴の長い患者は、体調の悪さを一時的に「病気におしこめる」対処をとる方がいた。これは、体調不良をとりあえず甲状腺疾患から来ているものだとする考え方である。一時的に「病気におしこめる」という対処はその後、体調が悪化する場合もあり、上手くいくケースといかないケースがあるが、「怠け」と思われることや感じることを抑えたり、原因不明の体調不